

聞名仏教

第 144 号 毎月発行
(発行日) 2022 年 9 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutuji6@gmail.com
郵便振替「東本願寺護持基金」
00930-7-146886

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

一人で行こう 佐々木蓮磨

暁烏敏師は、生まれつき極めて正直、全く表裏のない明朗な性格の方でありました。これが人から非難も受けるが、また慕われる点でもあったように思われます。

師は人も知る清沢満之先生の高弟で、民衆教化の実績においては、おそらく大正、昭和にかけて師の右に出る宗教家はなかったと言つて過言ではないでしょう。

師が清沢先生から初めて認められたのは、真宗中学の時代に先生から英語の訳を命ぜられたとき、何のためらいもなく卒直に「私は調べてきませなんだ」と答へられたことであつたと聞いております。そして先生から最も信頼を受け、また生涯、先生を慕われたのであります。

ところが、師が中年のころ、その卒直で奔放な性格が禍いして、世間からいろ

いろと非難攻撃を受けられたことがあつたそうです。そのころ「中外日報」が師の露骨な行動や私生活を忌憚なく紙上に暴露して、非難攻撃を浴びせかけたことがあつたのです。このことは師にとつては全くの致命傷ともいふべき打撃でありました。ところが師は、後

年に至つて、「中外の涙骨氏に感謝する」という一文を書いて世に発表されたのであります。その内容は大体、次のようなものです。「自分は中外の記事を読んだとき、全く谷底にでも突き落とされたような感じを受け

た。今までの説教も著述も、すべてがウソになり、今まで自分を信頼してくれた師友や信者から見放され、全く孤独無援の人間に落とされてしまった。そのときの気持ち、もはや、この世にたよるべきものは何ひとつとして無くなった。この

うえは仕方がないただ一人で行こうと腹を決めた。しかし、このときに初めて私は如来の光明に照らされたのであつた。もしも、中外の記事が出なかつたならば、私はアテにもならぬ外他のものに頼つて浮草のような危ない生活をつづけねばならなかつたのであろうが、

あの中外のヒドイ記事のおかげで、すべての仮り物かもぎとられて真実の自分に立ち帰らせてもらったことは何よりの倖いであつた。私は一時、中外紙を呪い、涙骨氏を怨む気持ちも起こつたが、今となつては怨みどころか、本当にありがたき感謝している。どうしても一度は、この気持ちを発表せねばならぬという一念から筆をとつたものである」と言うような意味の文章でありました。

私は数十年前に読んだものでありますが、深く心に響いて今なお忘れ得ないのであります。とくに「一人で行こう」という一句に限の味わいを感じました。私は暁烏師を思うとき、いつも心にうかぶのは、この「一人で行こう」という悲壮な一句であります。

その後、徳富蘇峰氏から「近ごろ読んだものの中で、暁烏氏の『中外の涙骨氏に感謝する』という一文ほど気持ちよく、また尊く読んだ文章はない」という述懐の手紙を暁烏師に寄せられたということを聞いて、いよいよ真実の響きというのが如何に強いものであるかということを痛感せしめられたのであります。(了)

【念佛寺法話案内】
毎月二十二日二時始。「同朋会」入門的な平易な法話。(八月休み)
毎月十八日午後六時半始。「真宗入門講座」易しい真宗入門。副住職担当。(八月休み)
毎月六日午後七時始。「聞名の会」真宗教義の研鑽。質疑の時間有。
毎月十二日三時始。「念仏会」専ら信心のみの座談。(八月休み)
どなたでも自由にお越し下さい。

現代真宗問答 9

我ならざるは
たらきに依つ
てであること
は疑う余地が
ありません。

きによって成り立っている
なら、他の人たちも同じな
のですね」

A 「ええそうです、広く言

うと生きとし生ける全ての
ものがアミダ仏の大きな
のちのはたらきにおいて存
在しているのですね」

B 「そうすると猫も犬も虫

もミミズも、みなアミダ仏
のいのちにおいて生きてい
ることになりますね」

A 「ええそうです。これを

人間同士でいうと、人類は
みな同じいのちを生きてい
る兄弟であるといえます。
中国の高僧であった曇鸞大
師の『浄土論註』に

〈四海の内みな兄弟たり〉
とあります。四海の内とは
全世界ということですよ。」

B 「この意味は、念仏者と
して兄弟とか信仰者におい
て兄弟とも解釈できますが、
どうなのでしょう」

A 「互いの念仏者なり信仰
者の間だけが兄弟であると
いうことではなく、信心の
有る無しにかかわらず兄弟
だということです。ただ智
慧がないと兄弟とは知れな
いので念仏の信心において

四海の内みな兄弟であると
いえるのでしよう」

B 「大谷派でよく言われて
きた言葉に、

〈ひとつのいのちをみんな
で生きている〉

とありますが、これも同じ
事実を言っているように思
います」

A 「ええそうです。アミ
ダ仏のはかりないのちの
中で、皆のいのちがあり、
生かされているのであり、
アミダのいのちの中で皆、
生きているのですね。アミ
ダ仏は私たちのいのちの大
地です」

B 「アミダ仏はいのちの大
地である、ということはア
ミダ仏は私たちそれぞれの
いのちの真実の主体と
いうことですよ」

A 「ええそうです」

B 「アミダ仏は私たちのい
のちの主体と
いうことですよ、大谷派の
スローガンに、

〈今、いのちがあなたを生
きている〉

と
いうのがあります。これ
もアミダのいのちが一人一
人のいのちに貫いている、
生きている主体、というこ

くという内容ですから、信
心の智慧とはこういう真理
を知る智慧でもあるのでし
ょう」

B 「このような信心の智慧

は人生の上でどういう意味
をもつてくるのでしょうか」

A 「私が今ここにいる」と
いうことが可能なのはアミ
ダ仏のはたらきによって可
能であり、アミダ仏のはた
らき無くしては一瞬も存在
し得ません。いわばアミダ
仏に生かされている私とい
えます。この場合の「生か
されている」というのは非
常に重い意味であり、根源
的な意味をもっています」

B 「この場合のアミダ仏と
はどういう内容ですか」

A 「アミダ仏の意味ははか
りない光明とはかりない寿
命のはたらきのことです。
私が今ここに存在している
という単純な事実が私が設
定したものではありません。

くという内容ですから、信
心の智慧とはこういう真理
を知る智慧でもあるのでし
ょう」

B 「このような信心の智慧

は人生の上でどういう意味
をもつてくるのでしょうか」

A 「私が今ここにいる」と
いうことが可能なのはアミ
ダ仏のはたらきによって可
能であり、アミダ仏のはた
らき無くしては一瞬も存在
し得ません。いわばアミダ
仏に生かされている私とい
えます。この場合の「生か
されている」というのは非
常に重い意味であり、根源
的な意味をもっています」

A 「真宗の信心の内容を現
代の時代状況の中で表現す
ると、〈私は一個の心ある小
さな物であってアミダ仏で
はない。けれども私はアミ
ダ仏のいのちの外には無い〉
といえましよう。これを西
田幾多郎博士の言葉でいう
と

〈我を超越したもの、我を
包むものが、我自身である〉
といわれる言葉にあたりと
思います。真宗の信心の内
容はこういう真実に触れる、
気がつく、と言つていいと
思います。この目覚めには
濃淡があり、私などの触れ
ようは本当にほのかとしか
言えませんが」

B 「真宗の信心は信心の智
慧といわれますが、こうい
う目覚めに関係あるのでし
ょうね」

A 「そうですね、信心はア
ミダ仏と人の関係、いわゆ
る撰取不捨の真理に気がつ

くという内容ですから、信
心の智慧とはこういう真理
を知る智慧でもあるのでし
ょう」

B 「このような信心の智慧

は人生の上でどういう意味
をもつてくるのでしょうか」

A 「私が今ここに存在している
という単純な事実が私が設
定したものではありません。

くという内容ですから、信
心の智慧とはこういう真理
を知る智慧でもあるのでし
ょう」

とを表現した言葉といえま
すね」

A 「ええ、そうです。これ
は真実を言い当てている言
葉だと思いません。ただ問題
はこういう話が一人一人の
実感となるということが非
常に難しいのです」

B 「これを単なる思想とか
観念とかスローガンとする
のではなく、これを一人ひ
とりが実感することが求め
られているのですね」

A 「ええ、それを求め、深
めて行く、これが仏道なの
です。一切衆生が無量のい
のちにあい、無量のいの
ちの中で生き、無量のいの
ちの中に生きている他の人
々と共に生きるというのが
仏教の目的と言っていてい
いでしょう」

B 「それが仏になる道なの
ですね」

A 「ええ、仏道が成就して、
そこに智慧が深まりますと
へもろもろの衆生は、みな
これ如来の子なり」涅槃経
へ今、この三界は、皆これ、
わが有なり。その中の衆生
は、悉くこれわが子なり」(法
華経)

というような智慧になると
言われています。これが仏
の無分別智の智慧といわれ
ています。すなわち世界と
一体となり、全てのいのち
を自己自身の内容である
と認識し、さまざまな個々の
生けるものを我が子と視て
慈愛する智慧、これが仏の
智慧であり慈悲です。生き
とし生けるものに対して、
こういう見方が成就したお
方を仏といわれるのであり
ましょう」

B 「仏になるとはそういう
ことなのですね。ただこれ
は余りにも高遠な理想であ
って、私たちの現実生活上
の意識とはかけ離れている
ように思われますが」

A 「そうですね。私たちは
仏になるのが目的と言って
も、現実の私はそうなって
はいません。しかし、この
仏の教えを聞き、仏の教え
に照らされて、この仏の教
えを通して現実の自分自身
を省みる。それが私たちの
実際の仏教実践でありま
しょう。そうすると、私は
仏どころか、いのちを自分
の物として私有化し、この

小さな我(自我)が私有化
したいのちに深く執着し、
この自分にとって都合のよ
いものを貪り、都合の悪い
ものを排除し憎むという煩
悩が身についてしまってい
る、いわゆる煩惱成就の凡
夫であることが逆に知らさ
れてきます」

B 「私のいのちはあらゆる
いのちにつながっており、
アミダのいのちの外にはな
いという智慧を聞くことに
よって、現実の私は他と切
り離し孤立した自分である
という妄念に染められてい
る凡夫であることを逆に知
らされるのですね」

A 「ええそうですね、そし
てそういう煩惱の塊のよう
な私ですが、私はアミダ仏
のいのちにおいて生かされ
ており、アミダ仏からは「我
が子」として愛されている
存在であることをお聞きし、
自他を分けて利害損得を考
える考えは迷いであること
が知らされます」

B 「そしてこの仏の教えを
単に知るだけでなくて、少
しなりとも実感していくこ
とが大事だと言われるので

すね」

A 「ええそうです。仏の智
慧から説かれた仏の教を聞
き、仏になる道がお念仏を
称え、お念仏のお心を聞く
ことによつて、仏の智慧の
こもったお念仏を通して、
煩惱の私たちの心に光とし
て入ってくださるのです」

B 「ではこういう仏教の教
えと現代の問題を付き合わ
せて考える時、どういう見
方ができるのでしょうか」

A 「それはどの民族である
とかどの国の人間であると
か云うことは、決して実
体的にあるのではなくさまざ
まな縁によつて、そう区別
しているだけであつて、全
ては共なるいのちの人間、
共にアミダ仏の大悲のいの
ちの中に生かされている人
間であることが真実である
ことが教えられます。そう
すると共に生きる、ともに
助け合つて生きるべき存在
であることが知らされます」

B 「如何なる人も同じいの
ちに生かされ、同じくアミ
ダ仏の大悲のかけられてい
る存在であつて、共にアミ

ダ仏の子である、という存
在の普遍的な真理、これを
元に人間と人間、また国と
か民族などの問題も考える
ことが必要なのですね」

A 「アミダのいのちを共に
生きている者だという基本
を無視し、銘々の存在は個
々別々な存在であつて、自
分のいのちは自分の物、他
者のいのちはまた別の物と
分け隔てをする。そうする
と隣人だけではなく民族や
国家が違うとそこにいる人
たちも個々別々の赤の他人
であり、利害損得によつて
愛したり憎んだり、友にな
ったり敵になったりして、
個々別々の対立的関係で他
者なり他国の人を見てしま
うのですね」

B 「実際、現代の世界を動
かしている考えは他者は別
物だという人間観ですね」
A 「そういう点で、今日、
どの国に住んでいる人も同
じ大いなる大悲のいのちの
中にいる人であるという見
方があるかないかは、現状
を見てますと大きな違いに
なつてくると思います。い
わゆる共に平等ないのちに

信心夜話

れる。「ああアミダ様が今ここについていてくださる」と。

南無阿弥陀仏と出な

仕事に追われて念仏の出ぬ時も、一声南無阿弥陀仏と、出て下さると矢張り仏は「ここ」でやる「気付くと」、亦出なさる。天地の中に在りて、どこからも抜け出る事の出来ぬ如く、既に如来のふところの中に抱かれて、逃げ出すことの出来ぬ身である。一代無理言つて、南無阿弥陀仏。

(松並松五郎念仏語録より)

* * *

さると、この天地の中にありながら、そのままが如来様のふところの中、ここから一步も抜け出せぬ。阿弥陀様のいのちの中から抜け出ることができない、これが一番有難い。どっちへどうころんでもアミダ仏のふところの中、生きても死んでもアミダ仏のいのちに掴まれている。

「一代無理いうて」とはどういうお心であろうか。

松並さんでも忙しいときには念仏を忘れるといわれる。私も忘れることが多いのですが、忘れて「これではいかん」と嘆くのも、あるいはお念仏をよく称えている時、「これでよい」と思うも自力の思い。どちらもお念仏を我が行にしている。ただ聞くだけである。お念仏を忘れる日常生活の中で、ふいと一声出てくださると、「ここにいますぞ」のアミダ仏のお声と知らさ

松並さんに聞いてみたい。阿弥陀様から離れて考えた行ったり、煩惱だらけの生活をして、アミダ仏から逃げ回っている私、それが「無理いうてだだをこねている私」と言われるのではなからうか。そんな私をどこまでも南無阿弥陀仏と出てください「ここにいます。お前を離さんぞ」と。これが一度や二度ではない、逆の凡夫の身に生涯寄り添って浄土へ連れて行ってくださる。

があつて、そこに線引きをして、そういう違いを重要視して対立しています」

生きている存在だという、こういう考えや思想がどの国の人にもいき渡ってほしいです。特にその国の指導者なりの考えや思想がどうであるかということは世界の平和にとって非常に大きな影響があるように思いますが

B 「今回のロシアのウクライナへの侵攻を考えますと、軍事同盟や経済交流だけでは平和にならないことがよく分かりました」

A 「ロシアの言い分はそれなりにありますが、ロシアの指導者が旧のロシア領土の回復というような思想に固執しているのが問題ではないでしょうか」

B 「そうですね、国の安全と云うことでは、各国との物流上、経済上の密接な関係が大事だとか、あるいは防衛力軍事力の備えの万全さが大事だとか、国同士の軍事的な連帯が大事などのことはしよつちゅう話されているようですが、その元にある人間観にはふれませんが

A 「ロシアの指導者がへロシアはロシアでその国民が幸せになり、ウクライナはウクライナでその住人が幸せになれ」という単純であるけれど、そういう考えになつてくれたらと思います。中国も同じで、台湾は中国の領土だから軍事な行使をしてでも台湾を統一するといふのでなく、台湾の人が中国に帰属するのがイヤだつたら、台湾は台湾で幸せになれ、中国は中国で幸せになる、という考えになら

ないのかと思います」

B 「武力によって殺しあいまでして領土問題を解決するという思想でなくて、その地域に住んでいる人はそこで幸せになるようにと考えられないものかと思います」

A 「とにかく先ず他の地域に暴力的な方法でそこを支配する思想では決して平和は来ないです。国の中でどういう思想や考えが行き渡っているか、指導層がどういう考えや思想を持っているかで国の舵取りが大きく変わります。これが非常に大事だと今回のロシアのウクライナ侵攻において考えさせられました。例えば中国の場合でも中国の指導者

がもっている国家観や人間観が根にある問題だと思います。それは現代の日本の指導者にも言えますね」

B 「アメリカファーストとか日本ファーストとか、あるいは自国を愛し他を否定は、戦争の危険をはらんだ考えですね」

(了)